

高等等教育機関へのインターンシップを活用した 障害のある生徒のキャリア発達に関する試行的研究

藤 井 明日香*

A Trial Research on Career Development Support Through the Internship at Higher Education for High School Students with Disabilities

Fujii Asuka

要約

国内において障害のある生徒の高等部から高等教育あるいは職業的自立へとつなげるための取組みは未だ発展途上であり、特別支援教育における大きな教育課題となっている。本稿では、障害のある生徒のキャリア発達を促すための1つの資源として、高松大学を活用し、生徒のキャリア発達を目的としたインターンシップを試行的に実施した結果を報告する。インターンシップは4日間のプログラムで構成され、生徒は大学生と共に演習形式や講義形式、ワークショップ形式の授業を体験した。プログラム実施の結果を基に、大学インターンシップを活用した障害のある学生のキャリア発達支援に関する教育効果と今後の課題について考察する。

キーワード：高等教育機関、キャリア発達支援、インターンシップ

(Abstract)

The aim of this paper was to report about a trial practice on career development support for high school students with physically disabilities who have desire of continue to university after their graduate. This program was consisted four days internship to Takamatsu university. They were experienced exercise-style classes, Lecture-style classes, workshop-style classes with university students in this program. The purpose of this program was to promote readiness for continue to university. In this paper, reports the educational effect for high school students of this program and forthcoming

* 提出年月日 2015年11月30日、高松大学発達科学部准教授

challenges.

Key Words : Higher Education, Career Development Support, Internship

1. はじめに

1.1 障害のある生徒のキャリア発達の現状

文部科学白書（2011）によれば、特別支援教育制度に在籍する児童生徒は、この10年間に約1.5倍に増加している。2007年に施行された特別支援教育で求められている特別支援教育校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名、専門家の受け入れ等も順調に増加している。しかし、特別支援学校高等部卒業生の就職率には著しい変化はなく、福祉施設への入所率は64.2%と高止まりのままである（文部科学省、2014）。これは、特別支援教育の修学期の整備は完成されつつも、学校教育から社会生活への移行期の課題に対する新たな施策の必要性を表している。この重要な解決策の1つとして、児童・生徒の職業観・勤労観の育成と効果的な資源環境の活用の2つの取組みがあげられる。

障害のある生徒の教育課題の1つとして、生徒の職業観・勤労観の育成がある。この職業観・勤労観とは、職業や勤労についての知識・理解とそれらが人生に果たす意義や役割に関する個々の認識を指す。これは、生徒の自身の職業・勤労を媒介とした人生観ともいえ、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するのかといった基準となる。この職業観・勤労観の育成は単に、生き方や進路選択の基準の獲得としてだけでなく、自立した個人として他者と協働して生きていくために身につけておかなければならない最低限の力の獲得である。この力は、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの領域から構成されており、これらを育成する教育は、キャリア教育としてその重要性が提言され、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において職業体験などインターンシップを通じた様々な取り組みが行われている。

障害のある生徒にとって、職業観・勤労観を育成するキャリア教育は更に重要になる。それは、障害のある生徒が特別支援学校高等部を卒業した後の主な進路先の特徴にある。知的障害のある生徒の高等部卒業後の進路は、25.3%が就職、58.7%が福祉施設など職業的自立を目指した進路選択が主となっている。視覚障害や聴覚障害、肢体不自由、病弱など障害種によって異なるが、これらの障害と知的障害を併せ持たない生徒（以下、知的障害のない生徒とする）は、1.8%から42.2%の生徒が高等教育への進学といった進路選択を

行っている。こうした高等部卒業後の進路の違いから、知的障害のある生徒のキャリア発達には、実践的な職業技能、望ましい職業観・勤労観の獲得が求められている。一方で、知的障害のない生徒には卒業後に高等教育等に進学を希望する生徒もいることから、そのキャリア発達は、望ましい職業観・勤労観の獲得とともに、更に幅広い経験を基にして進路を選択する力の獲得が求められている。

1.2 キャリア教育の課題解決と高等教育機関の活用

特別支援学校高等部において生徒のキャリア発達を効果的に促進させるためには、特別支援学校の外で実践的な職業体験や体験学習を行うことが必要である。障害のある生徒は、日頃から作業などを中心とする学習を通して、職業的自立に求められる力の育成が行われている。特別支援学校の外における体験学習の機会は、日頃の学習成果の確認や新たな課題への気づきなど重要な教育的機会となっている。

広島大学東広島キャンパスでは、2009年から広島大学附属小・中学校に在籍する障害のある児童生徒が職業体験学習を行っている。この職場体験学習では、特別支援学校教諭を志す学生が児童生徒のサポートに付いて体験学習を実施しており、体験している児童生徒と大学生がともに学び合い、相互のキャリア発達を促している。しかしこうした体験学習を行う場は、地域によって資源量に差があり、全国的な傾向として、十分に実習先が確保されておらず、障害のある生徒のキャリア教育を行う上で大きな課題となっている。高等教育等への進学を希望する生徒には、キャリア教育の1つとして、大学等のオープンキャンパスを活用した学習が行われている。しかし進学を希望する障害のある生徒のキャリア発達には、より具体的に高等教育の疑似体験を行うことが重要になるこれら体験学習を通して、これまで特別支援学校高等部内では、常に支援が備えられた環境において成立していた身辺自立と一般的な環境において求められる身辺自立との違いを経験し、自身の社会生活能力に対する現実性の高い振り返りの機会を与えることが期待される。

1.3 研究目的

本研究の目的は、香川県下の特別支援学校高等部に在籍する生徒の職業観・勤労観を育成するために、高等教育機関である高松大学の資源を活用して障害のある生徒の個々のニーズに応じてキャリア発達を促すインターンシップを試行的に実施することである。

2. 方法

2.1 実施プログラムのねらい

本プログラムでは、卒業後に就職を目指す生徒には、職業体験を中心とするインターンシップを行う中で、実践で求められている技術や態度について生徒自身が体感し、より実践的な職業的技能的向上及び勤労観を豊かにすることを目的とする。また、卒業後に進学を希望する生徒は、大学の講義に参加したり、講義内で発表したりすることによって、大学で行う学びの形態や求められる学習姿勢について体感し、生徒自身の卒業後のイメージを豊かにすることを目的とする。また、本学に在籍する特別支援学校教諭を志す学生をサポート役として介入させることで、学生自身の特別支援学校教諭の職業イメージの形成や、自己のキャリア発達に対する振り返りなど、学生自身のキャリア発達を促す教育機会を創出し、障害のある生徒と特別支援学校教諭を志す大学生の双方のキャリア発達を促す教育的成果が期待される。事前準備段階において、職業体験を中心とするインターンシップを希望した生徒がいなかったため、当該年度は大学体験を中心とするインターンシッププログラムのみ実施することとなった。

2.2 対象者

香川県下の特別支援学校高等部に在籍する生徒及び高松大学において特別支援学校教諭免許状の取得を目指している学生である。特別支援学校高等部生徒は香川県内の肢体不

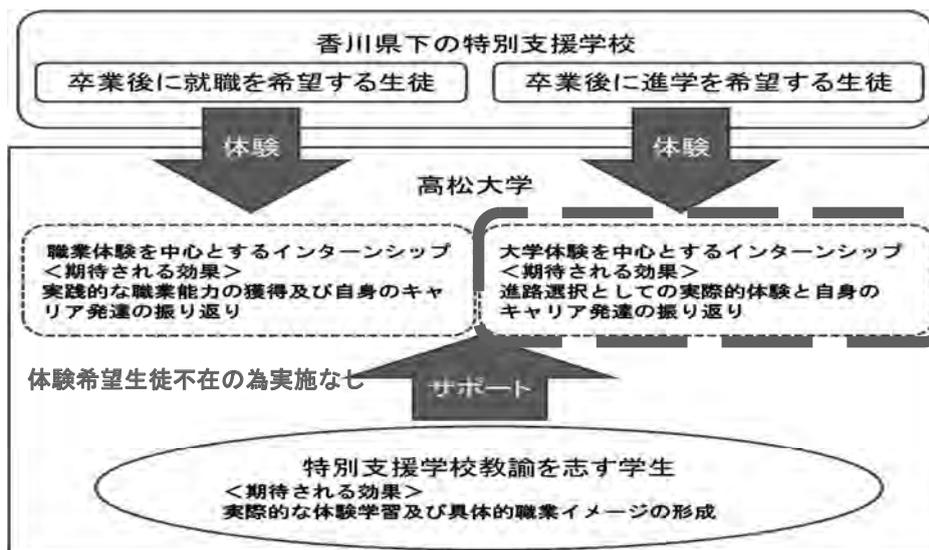


図1 本プログラムのイメージ図

由特別支援学校の高等部1年に在籍する生徒2名が参加した。両名、高等部卒業後は高等教育機関への進学を希望している生徒である。高松大学の学生は、特別支援学校教諭免許状取得を目指している1年生から4年生計14名が参加した。

2.3 実施期間

平成26年11月26日（1日）及び12月2日～4日（3日間）の計4日間実施した。

2.4 実施場所

当該プログラムは、高松大学各種施設「2号館【2301、2309】、本館【多目的ホール】、図書館、食堂、売店、駐車場」を使用した。

2.5 プログラム内容

プログラム内容は、主に3つのワークショップ形式の学習活動、2つの演習形式の学習活動、1つ講義形式の学習活動によって構成された。

ワークショップ形式の学習活動では、「高校と大学の違いを探索しよう!」、「大学で学ぶことの意味ってなあに?」、「大学に行くために必要なことってなんだろう?」の3つの内容から構成されていた。それぞれのワークショップでは参加した生徒と大学生が合同でグループワークを行った。

演習形式の学習活動では、「演習形式の授業を受講してみよう!【ゼミ】」を2回実施した。1回目の演習活動では、図書館を利用し、大学生と共に卒業論文テーマ探索の仕方や発表レポートの作成の仕方、資料収集の仕方などを体験した。2回目の演習活動では、実際に生徒の作成したレポートを基に発表を行った。

講義形式の学習活動では、「講義形式の授業を体験してみよう!【社会的養護：里親制度と養子縁組制度】」に関する授業を聴講した。その中で、90分間の授業を体験し、ノートテ

表1 プログラム日程と内容

	9:30-10:00	10:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:30~
1日目 11/26 (水)	登学	オリエンテーション 一日の流れと 伝達事項	顔合わせと学内紹介	昼食	高校と大学の違いを探索しよう! 【WS①】	帰宅
2日目 12/2 (火)			大学で学ぶことの意味ってなあに? 【WS②】		大学の授業を体験しようⅠ【P①】	
3日目 12/3 (水)			就職活動ってどんなこと? キャリア発達ってどんなこと?		大学の授業を体験しようⅡ【E】	
4日目 12/4 (木)			大学の授業を体験しようⅢ【P②】		大学に行くために必要なことってなんだろう【WS③】	

イクの体験やレポートの提出などの課題を体験した。それぞれの記号は活動内容で使用した学習形式を示しており、WS: ワークショップ形式 E: 講義形式 P: 演習形式である。

3. 結果

3.1 プログラムの活動内容と実施風景

3.1.1 1日目【2014/11/26(水) 9:30-14:30】の活動内容と様子

1日目のプログラム(表2)では、学内の環境を知ること、サポートに入る大学生との交流を目的にプログラム内容を設定した。午前中は学生との顔合わせと学内紹介を実施した。本学のパンフレットや入学案内を用いて学内の学部の特徴やコースの特徴などについて理解を深めた。またプログラム実施中にサポートに入る大学生との交流を図るために参加学生及び大学生と他己紹介を用いて、互いの理解を深めた。午後は、学内の見学と探索を中心に行い、特別支援学校との相違点について気づいた点を整理するワークショップを行った(図2、図3)。

表2 1日目のプログラム内容

	9:30-10:00	10:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:30~
1日目 11/26 (水)	登学	オリエンテーション 一日の流れと伝達事項	顔合わせと学内紹介	昼食	高校と大学の違いを探索しよう!【WS①】	帰宅
			プログラムの流れ		大学の授業について	
			アイスブレイキング		学内の見学	
			参加生徒の紹介		図書館	
			参加学生の紹介		各教室(本館, 体育館, サークル棟など)	
			学内紹介		ワークショップ	



図2 顔合わせの様子



図3 学内探索の様子

3.1.2 2日目【2014/12/2（火）9:30-14:30】の活動内容と様子

2日目のプログラム（表3）では、大学で学ぶことの意義やその期待について理解を深めることを目的に、大学生と大学に通うことへの意義やそれによって得られることについてワークショップを行った。また午後には、実際に大学の授業の体験として、演習形式の授業を体験した。演習課題は「卒業論文のテーマを探索の仕方を知ろう」であった。大学4年生の卒業論文のテーマ探索の経験とそれまでの演習課題に関する発表を聞き、実際に資料収集を図書館などで行い、卒業論文テーマの探索を体験した。またこのテーマ探索にあたっては最終日の演習形式の授業において、各自レポートとして発表することが課題としてだされた（図4）。

表3 2日目のプログラム内容

	9:30-10:00	10:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:30~
2日目 12/2 (火)	登学	オリエンテーション 一日の流れと 伝達事項	大学で学ぶことの 意味ってなあに？ 【WS②】 ・キャリア発達と高 等教育について（入 学から） ・在学生と大学へ通 うことの意味につい て一緒にポスターを 作成する	昼食	大学の授業を体験し よう I 【P①】 演習形式の授業を受講 してみよう！【ゼミ】 ・卒業論文のテーマ探 索の仕方について ・卒論テーマの選定の 仕方 ・発表レポートの作成 ・資料収集	帰宅

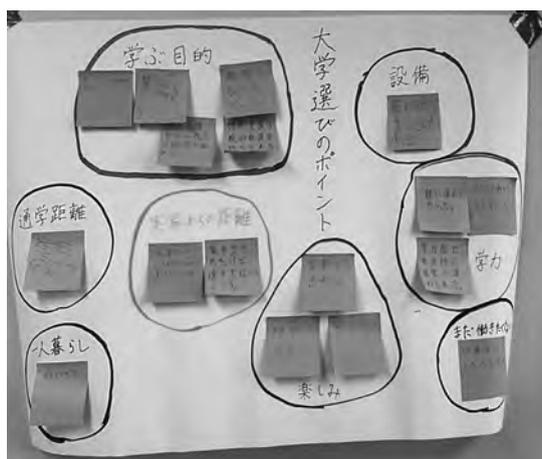


図4 ワークショップで作成したポスター

3.1.3 3日目【2014/12/3（木）9:30-14:30】の活動内容と様子

3日目のプログラム（表4）では、大学の出口における取組みとして就職活動の実際やそれに向けた準備などについて知ることを目的にプログラム内容を設定した。「就職活動ってどんなこと？キャリア発達ってどんなこと？」では、大学の卒業後の進路の種類や学内の支援窓口であるキャリア支援課の取組み、卒業後の進路について学生が悩む時期や決定した時期などについて大学4年生の学生の体験を基に情報交換を行った。午後の活動では、大学の授業を体験してみようⅡとして、講義形式の授業を体験した。講義形式の授業では、社会的養護を聴講し、「里親制度と養子縁組制度」に関する授業の感想文を作成した（図5、図6）。

表4 3日目のプログラム内容

	9:30-10:00	10:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:30~
3日目 12/3 (水)	登学	オリエンテーション 一日の流れと 伝達事項	就職活動ってどんなこと？ キャリア発達ってどんなこと？ ・大学の卒業後について ・キャリア支援課について ・卒業後の進路について決めるなどについて 学生と情報交換を行う。	昼食	大学の授業を体験しようⅡ【E】 講義形式の授業を体験してみよう！【社会的養護：里親制度と養子縁組制度】 講義授業の体験として【社会的養護】を聴講する。 里親制度と養子縁組制度について取り上げる予定である。	帰宅



図5 キャリアガイダンスの様子



図6 講義形式授業聴講の様子

3.1.4 4日目【2014/12/4（木）9:30-14:30】の活動内容と様子

4日目のプログラム（表5）では、大学の授業を体験しようⅢとして演習形式の授業を体験した。この授業では、2日目に実施した卒業論文のテーマ探索の課題に関するレポートの発表を行った。生徒の準備してきたレポートを基に、各自が考えた卒業論文のテーマとそれらの資料収集の仕方について発表がなされ、大学生がそれらのテーマについて意見交換を行った。

午後の活動は、「大学に行くために必要なことってなんだろう？」をテーマに大学生と共に学生のこれまでの経験と生徒の体験による気づきを基に、高等学校大学で準備しておくべき事項について整理するワークショップを行い、各自ポスターを作成した。ポスター作成後は、それぞれが今回のプログラムで学んだこと感じたこととしてポスター発表を行った（図7）。

表5 4日目のプログラム内容

	9:30-10:00	10:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:30~
4日目 12/4 (木)	登学	オリエンテーション 一日の流れと 伝達事項	大学の授業を体験しようⅢ 【P②】 演習形式の授業を受講してみよう！【ゼミ】 2日目で設定した課題の提出及び発表する。	昼食	大学に行くために必要なことってなんだろう？ 【WS③】 学生のこれまでの経験と生徒の体験による気づきを基に、高等学校段階で準備しておくべき事項について整理して発表する。	帰宅

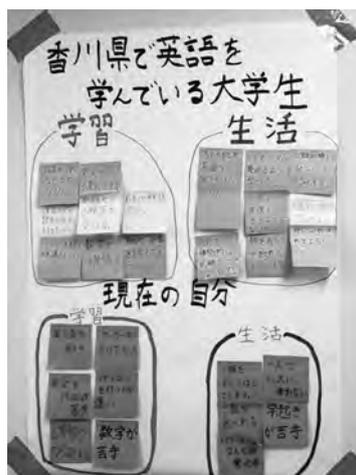


図7 4日目生徒作成ポスター

3.2 プログラムの評価

プログラム評価として、参加した特別支援学校の生徒2名の両名から感想文の提出を依頼した。またプログラム期間中に引率した教員へアンケート調査への協力を依頼し、その回答をもってプログラムの評価とした。以下に生徒の感想文及び引率教員のアンケート結果を掲載する（図8）。

図8 参加生徒の感想文

1. 体験生徒の感想文による評価	
男子生徒	<p>拝啓</p> <p>先日は私たちのために体験プログラムを作ってくださいありがとうございました。4日間のプログラムで、いろいろなことを学ばせていただきました。勉強面では毎日コツコツやり続けることが大切だということがわかりました。私は、英語が好きなので英語の勉強をもっと頑張ります。さらにノートの取り方も工夫していきたいです。生活面では、自分でできることを増やし、できないことは、自分から積極的に依頼することが大切だということを改めて感じました。</p> <p>最初は大学がどのようなところか、大学ではどのようなことをするのかということがあまりわかりませんでした。しかし、皆様が優しく、丁寧に教えて下さったので、大学の様子がよく分かり、ますます大学生になりたいという気持ちが高まりました。</p> <p>私が一番心に残っているプログラムは、ワークショップです。皆さまの話を聞かせていただく中で、自分の課題や進路の決め方が少しずつ見えてきました。</p> <p>今回の体験は、とってもいい経験になった上、楽しかったです。これからは、皆様のアドバイスを生かして、大学生になるための準備をしていきたいです。</p> <p>お忙しい中、私たちのためにお時間をご用意いただき本当に感謝しております。ありがとうございました。寒くなってきました。皆様、お体にお気をつけてください。</p> <p style="text-align: right;">平成26年12月7日 敬具 (原文ママ)</p>
女子生徒	<p>拝啓 昨年より早く厳しい寒さとなっていますが、皆様お変わりありませんか。私は風邪をひくことなく元気に学校生活を送っています。</p> <p>先日は、私達の為に大切なお時間を頂きありがとうございました。</p> <p>私は、今まで大学のことについてまったくわかっていませんでしたが、体験させていただくなかで得るものがたくさんありました。大学生活とはどのようなものなのか、どのような授業があるのか、大学卒業後の進路は一人で決めるのではないこと、これから自分がすべきことなどがわかりました。</p> <p>大学生になる為に必要なことは、藤井先生に教えていただいた、計画や予定を立てる時に大切なことを手帳に付箋を貼って管理したり、自分が移動にどれだけ時間がかかるのか計算して早めに行動できるようにしたり、コミュニケーション力をつけ自分が思っていることを相手にわかりやすく伝えられるようになることだとわかりました。これらの学習では、自分がわかりやすいようにノートをとったり、自分なりにまとめたりしながら、自分にあった勉強方法を見つけていきたいと思えます。さらに、漢字や英語が特に苦手なので少しでも苦手なことを減らすことができるように毎日少しずつ勉強していきます。</p>

	<p>皆様が優しく、面白く、様々なことを分かりやすく教えてくださったり、校内を案内してくださったりしたので、この4日間、多くの発見ができ、楽しく過ごすことができました。ワークショップやゼミ、講義など様々な体験をさせて頂きありがとうございました。これから少しずつ自分と向き合いながら、沢山ある課題を解決していこうと思います。</p> <p>4日間、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。これからますます寒くなると思いますが、お体に気をつけてお過ごしください。</p> <p style="text-align: right;">平成26年12月4日 敬具 (原文ママ)</p>
--	---

3.3 引率した特別支援学校教員を対象とする評価アンケートの結果

引率した教員を対象に、質問紙アンケート調査を実施した。プログラム内容及びその効果に関する設問を15問設定し、それぞれ「7：非常に満足した」から「1：非常に課題があった」とする7件法で回答を依頼した。またそれぞれの設問についてコメントがある場合には自由記述の回答も併せて依頼した。回答の結果は以下の通りである（表6）。

表6 引率教員の評価アンケート結果

2. 引率教員による評価アンケート結果	
設問項目及び自由記述	評価点
Q1. プログラムの目的及びねらいの設定について 高等教育を体験でき、そこから自ら課題を見出し、以後の学業への意欲が高まるという貴重な学習をさせていただきました。	7
Q2. プログラムの開催時期について 本校性の現場実習期間と日を重ねて実施できたことで、授業への影響が少なく、心おきなく体験できました。	7
Q3. プログラムの開催期間の長さについて【計4日間、1日間と3日間に分けて実施】 一日目があったことで、翌週のプログラムを初めから落ち着いて取り組むことができた。また、3日間あったことで課題作成、提出という体験もさせていただくことができました。	7
Q4. プログラムの内容とその構成について 綿密な計画を立てていただき、充実した内容で大変感謝しております。	7
Q5. 各プログラムで課された課題の量について 今のままではいけない、という課題意識が高まり、プログラム後、意欲的に課題解決に取り組むことができています。	7
Q6. 本学内の設備環境について【多目的トイレやエレベーター、バリアフリー設備について】 図書館は大変危険性が高く感じられました。部屋の出入り口の扉があと数十cm幅が広ければ安全性が確保されるとも感じました。	4

Q7. プログラムに参加した学生の対応について	7
大変大学生らしく、日常の中の素直な見解を生徒にご提示いただけたことに感謝しております。特支に関心のある方々ゆえの対応のすばらしさにも感服しました。	
Q8. 【1日目：ワークショップ1】「高校と大学の違いを探索しよう」について	7
学内の探索ができたことで、翌週は極度の緊張がなく、さらに登学時から自分たちで移動しようとする意欲的な態度につなげることができました。	
Q9. 【2日目：ワークショップ2】「大学で学ぶことの意味ってなあに？」について	7
意見の出し方、支援の依頼の仕方等の課題に気づけ、翌日から解決に向けて努力することができていました。学生の皆さまの素直なご意見も参考になった様子でした。	
Q10. 【2日目：演習1】「大学の授業を体験しようⅠ」について	7
これまでの学習環境では論文やレポートを書くことの大変さを理解することが難しかったのですが、大学生の皆さまのご意見も伺えたことで、その心構えと課題意識を身につけることができました。	
Q11. 【3日目：オリエンテーション】「就職活動ってどんなこと？キャリア発達ってどんなこと」について	7
就職を支援してくださる部署があることを知り、生徒は安心できた様子でした。また入学後は社会人生活を意識して、見通しをもった学校生活を送るべきことを学べていました。	
Q12. 【3日目：講義】「大学の授業を体験しようⅡ」について	7
ノートテイクのあり方、課題のまとめ方等の課題意識をもつことができるようになりました。	
Q13. 【4日目：演習2】「大学の授業を体験しようⅢ」について	7
自分のもっている力を客観的に把握することにつなげることができました。	
Q14.本プログラムを体験したことによる生徒への影響として、変化を感じられた内容はどのような内容ですか。以下の例示のうち、変化を感じられた内容について文頭の【 】内に順位を付けてください。	
【 1 】 ①高等教育進学への関心の高まりや意欲の向上 【 2 】 ②自身の身辺自立や支援を要請することへの自発的な意識の向上 【 3 】 ③学習面の課題に対する現状の認識の向上とこれらの課題に対して取り組む姿勢の変化	
Q15. その他お気づきの点や新たに加えることで、より充実すると思われるプログラムの内容などがございましたら、以下に記述をお願いいたします。	
綿密かつ学習効果の高いプログラムをご用意していただき、また丁寧な指導をいただきまして本当にありがとうございました。翌日から生徒の意欲、行動力が向上したことが目に見えてあられ、また本校の多くの職員からそれを認めていただけておりました。先生そして学生の皆様、本当にありがとうございました。貴重な学習の機会を与えていただきましたことを感謝いたしております。	

4. 考察

本研究では、当初大学キャンパスを利用したインターンシップとして、就労体験と高等教育体験を予定していたが、本年は就労体験の実施希望をする該当生徒がいなかった為、

高等教育体験プログラムのみの実施となった。

本プログラムは、高等教育への進学を希望している特別支援学校在籍生徒を対象に、高等教育体験期間を4日間設定し、高等教育で実施されている授業形態を体験し、一部の内容では実際に開講されている授業を体一般学生と共に受講した。また高等教育進学への準備及び高等教育在籍期間の過ごし方、卒業後の進路の開拓の仕方などについても盛り込み、高等教育機関へ進学することの意義の確認及び実際的な課題について整理する機会を創出した。

本年度の体験生徒は2名共車いすを使用しており、現在通っている学校と異なる物理的環境において、学内生活を体験したことは、生徒の自身への課題への気づきにつながるきっかけとなったと思われる。また、実施に大学生の進学先決定の動機及び入学後の生活などについてワークショップを共に実施することで、自身の進路決定に必要な情報や入学後の生活において事前に準備すべきことを整理することができたようである、また、既に卒業後の進路が決定している4年生と卒業後の進路決定や就職先の探し方についてワークショップを実施することで、高等教育期間の過ごし方及び卒業後の進路決定の仕方について知る機会を提供することができた。またプログラムでは、実際に演習課題及び講義受講後のレポート課題を設定して、提出することを課題として設けた。この課題遂行を通して、自身の学業面での課題や工夫の仕方について振り返りをする機会を提供することができたと考える。

両名のプログラムの感想及び教員の評価からも、本プログラムは、生徒の高等教育進学意識の向上と現状の課題意識を高めることに寄与したと考えられ、障害のある生徒のキャリア発達を促す教育的プログラムとして一定の成果をあげることができたと思われる。今後の継続希望の意見もあることから、次年度以降は受け入れ生徒数の増枠も検討していく予定である。

5. 謝辞

本研究は一般財団法人百十四銀行学術文化振興財団 産業・学術部門助成の研究助成によって実施されました。このような研究機会をご提供いただきましたこと心より感謝申し上げます。また研究実施にともないご協力いただきました皆様、本プログラムへ参加いただいた特別支援学校の皆様、高松大学の関係部署の皆様、学生の皆様のご協力によって本研究を実施する運びとなりました。心より感謝申し上げます。

6. 引用参考文献

文部科学省（2011）平成23年度文部科学省白書.

文部科学省（2014）特別支援教育資料第1部集計.

文部科学省（2014）平成26年度特別支援教育体制整備状況調査調査結果.

